

# 南米の島崎藤村

——国策的国際文化交流の再考——

目 野 由 希

## 一 はじめに

二〇〇一年に文化芸術振興基本法が制定され、二〇〇二年には文化庁が国際文化交流懇談会を催して今後の国際文化交流のマスタープランを作成し、二〇〇三年以降、国際文化政策はますます「戦略的」傾向を深めている。

とはいえ、これは昨今に始まったことではない。文学者ならびに日本近代文学研究者の交換教授、海外での講演会などの近代的な国際文化交流が本格化したのは、国際文化振興会（現・国際交流基金）が創設された一九三四年以降、ことに一九三九年以降であると思われる。

当時の文学者による文化交流事業協力者といえ、島崎藤村や野口米次郎が挙げられよう。このうち、日本ペンクラブ会長としての藤村の言動と国粹主義の萌芽は、戦時下の特殊なあり方というより、むしろ現代の文学者および日本文学研究者が、国際文化交流の際にとる／＼とらされる行動様式の原型にあたるという指摘を、稿者は別の箇所で行った。

この指摘から、晩年の藤村を後代から批判するのは容易だが、文学者と文学研究者にとり、藤村風のあり方が戦後の国際交流の原点であることは否定できないため、功罪併せて冷静に再評価していくのが、現代のわれわれにとり不可避の課題であるとの結論に至った。

本稿ではさらに、民間組織とはいえ、当時未だに外務省の外郭団体に等しかった日本ペンクラブ代表として、藤村が経験した日伯間ナショナリズムの高揚と衝突、さらにこの衝突の周辺で展開した、エキゾティズムの高揚について論じる。

## ニ ブラジル大使から藤村への「通告」

藤村は一九三六年に日本を出発し、日本ペンクラブ会長として、ブエノスアイレスでの第十四回国際ペンクラブ大会に出席する。副会長の有島生馬を含む一行は、神戸を振り出しにシンガポール、コロンボ、ダーバン、ケープタウンを経て南米に至る。大会の前後にはブラジルを訪問し、帰途は北米とフランスを経て、この道順を逆にし、一九三七年に日本へと戻る。これら植民地都市を見て歩いた経験が、彼に欧米嫌悪の感情をもたらし、様子は、紀行文「巡礼」にみることができる。

シンガポールでもアルゼンチンでもブラジルでも、藤村は日本人学校や日本人会を訪れる。各国の日本人会で、藤村が日本語・日本の童話、芸術について語る愛は真剣だが、ある種の無邪気さを含んでいる。ブラジルでは当局の移民同化政策に言及した上で「移民の間に於ける教育の普及も容易でなく、第二世第三世の末にかけて日本人の素質の退化を深く憂ふる人々すらある」と、ナイーブに日本語と日本文化教育を求める。また「所謂国際的な物の考へ方も欧羅巴中心でありすぎる」と国際ペンクラブ大会の席上で語ろうとし、有島生馬に止められた話は有名である。

舌禍は、帰国後にあらわれた。

1199 一月ママ：日 東京帝国ホテルより 大阪商船横浜支店宛（托便）

- 一、アメリカ文化史。
- 一、アメリカ文学史。
- 一、アメリカ詩歌集。
- 一、シンクレア・ルイス著作小説。

一、文芸評論に関する著作数種。

一、児童読本数種。

一、美術書類数種その他。

右、日本郵船に托し紐育より直送せしものに有之候。

島崎春樹

《参考》これは近親の者に託しママで書物受取りのため。藤村は前年十二月二日、パリのラスパイユの宿舎から朝日新聞へ通信を送ったのを最後に、十二月十三日パリ出発、新年を紅海海上に迎え、神戸に上陸、その際の談話が一月二十四日付の『ジャパン・タイムス』紙上に掲載され、之を閲読したブラジル国大使から「誤解を惹起する虞あり」との一文ママを、日本外務省あてに通告があり、外務省アメリカ局長より、その旨（一月三十日付）藤村にあて通達があった。

一九三七年、藤村六十六歳時の書簡についての、全集中の記事である（二二九）というのは、全集中の書簡整理の（サンプル）。

ペンクラブ経由の洋行帰りの藤村が、近親者に頼んでニューヨークから到来した資料を受け取りにいつてもらうための覚書である。

ここに添えられた《参考》は、やや文意がとりにくい。この読みにくい《参考》がなければ、そのまま読みすごしてしまいそうな事務的な内容の書簡である。しかし、ブラジル大使からの通告が、外務省アメリカ局長経由で、ペンクラブ会長の藤村に通達されたのであれば、そちらの方が書物の受け取りよりも重要であろう。

この『ジャパン・タイムス』記事は、入手・閲覧ができない。《参考》で指示されているのは『ジャパン・タイムス』だが、一九三七年時点で『The Japan Times』という名の英語新聞は刊行されていない上、名が近似する『The Japan Times & Mail』の一月二十四日付の紙面には、藤村関係の記事は掲載されていないからだ。

《参考》が言及している記事は、おそむく『The Japan Times & Mail』(一九三七年一月二十五日)の「Toson Shimazaki, Foremost Writer Back From Brazil: Head Of P.E.N. Club Of Japan Tells Of Convention In Buenos Aires」や、おそむく「(図、一)」。

以下に、日本語で大意を示す。

「日本ペンクラブ会長の島崎藤村がブラジルからヨーロッパを経て帰国した。藤村夫妻はブエノスアイレスでの会議の後、欧米旅行を経て帰国。ボストンでは日本美術展を見て、のちマルセーユに渡った。神戸で、次のように旅行の印象を語った。「ペンクラブ大会では様々な国から来た代表派遣団による議論があり、マリネットのイタリヤ表現主義とその他が特に素晴らしい議論をした。東京での一九四〇年の国際ペンクラブ開催が皆に承認され、インドの代表派遣団は我々の申し出を喜んで受け入れた。文学作品の翻訳の問題について、代表団たちは次の段階に解決を求めると決めた。ブラジルでは、私は移民について調べ、サンパウロに「やまとことば」といわれる古典文学の碑を建てるための準備をおこなった。大理石製のこの碑には、万葉集の詩歌が彫られるだろう。日本移民については、日本政府による保護の必要を感じた。アメリカではニューヨークランドにあるエマーソンの住居跡を訪ね、アメリカの偉大な詩人に敬意を表した。石造のビルディング群から、あまたの著名なアメリカの詩人たちがあらわれてくるなんて、本当に驚きだ。フランスではアンドレ・ジイドとアランが一番読まれている。しかし政治問題が文学の進歩を妨げている。一九三六年のゴンクール・アカデミーには、こうした状況であまり熱意が感じられず、刊行物がみられない。」(目野要約)

つまり、この内容は「国際ペン・クラブ大会より帰国の際の談話」、「南米その他の旅より帰ってきて」に記載された通りの帰国談話の筆記にすぎない。

藤村に通達が来た理由は、現時点では不明である。ただし、本新聞記事に通告を出したのはブラジル大使なので、問題があるならブラジルに関する記述箇所であろう。

### 三 ナシヨナリズムの衝突

「通達」の理由として、次のことが考えられる。

第一に、ブラジルの日系移民に、日本政府の保護が必要とする見解への抗議である。

一九二〇年代から台頭し始めたブラジル・ナショナリズムは、一九二三年の第一次排日運動を皮切りに、一九三〇年のゼツリオ・ヴァルガス革命を経て、一九三四年の「移民二分制限法」可決をみる流れとして、日系移民に甚大な影響を与えた。特にこの年一九三七年の「十一月のクーデター」を経て独裁政権を樹立したヴァルガス大統領による、ブラジル精神 (Brasilidade) と国家主義の高揚、国民の形成と統合を目的とする、中央集権的なエスタド・ノーボ体制<sup>ニ</sup>が、一九三八年には出来上がる。この後、ブラジル国内の外国人学校閉鎖、外国語新聞を含む外国語印刷物の発行禁止など、日系人の日本語コミュニティにとって致命的な政策が施行され、政府による海外居留民の保護をしのぐ同化政策が浸潤してゆくのである。

この時局に際し、日本語の歌碑を残し、日系コミュニティで日本語教育の必然性を説き、日本語で童話を語る藤村の姿勢は、当時のブラジルの移民政策とその方針を考えれば、ほとんど挑発的といつてよい。南米旅行の記録である紀行文「巡礼」の初出は、一九三七年から一九四一年までと長期にわたる。ここで語られる日本語教育への熱意と、その彼なりの実践形態である児童文学への情熱は、実に没年まで継続する。この旅行の印象は、藤村没年までよほど強く残っていたのだろう。

日本も当時は、ナショナリズムを背景とする日本語教育が、国際学友会などの外務省管轄下にある公的機関によって組織的に意識され始めた時期にあたる。日伯それぞれの言語政策にかかるナショナリズムが、移民という不安定な立場にあるひとびとの足元で、一九三七年に激しく衝突しあったのである。

同化政策を押し進めるブラジル政府から見れば、「ブラジルの日系移民は日本政府が保護すべき」という、日本の文学者からの挑戦的な発言に対し、「通告」で応酬したということではないだろうか。

他の理由として、欧米經由の帰国であるのに、ブラジルから帰国したという記事の題名に問題があるとも考えられるが、その場合は「通告」よりは記事の訂正要求になる方が自然ではないかと思われる。

むしろ、〈文学者〉たる藤村の日本語教育強化の提言は、日本の当局には採用されない。一九三七年末の時点で、外務省アメリカ局の方針は、「伯国移民ニ対スル政府補助金及在外子弟ノ教育ニ政府力介入シ居ルコト等ニ関シテ

ハ成ル可ク明言ヲ避ル様留保アリ度旨当省ヨリ社会局ヲ通シ在寿府国際労働機関帝国事務所宛注意ヲ喚起シ置ケリ」という状態になっている。

ここでは、外務省の判断の方が藤村よりも柔軟で、視野も広いようである。とはいえ、当時の藤村の国家主義的傾向と外務省アメリカ局の判断の、どちらがどう正しいかを今の時点から考察しても、大した意味はないだろう。日本の文学者と国策的国際文化交流の関係という観点からいえば、重要なことは、藤村をめぐる環境が現在の文学者・文学研究者たちと同一であること——一九三〇年代後半からの文化政策において、たとえ外務省の資金を受けた国策上の当局派遣者であっても、文学者の発言は政策決定因子としてはほとんど機能しないこと——ではないだろうか。

その意味で、晩年の藤村を、戦時下の右傾化した国策協力者として批判してきた従来の見方は、改められるべきであろう。彼は確かに、南米に派遣されてナショナリスティックな高揚を感じ、そのため、その後右傾化したかもしれない。一九四二年の大東亜文学者大会で聖寿万歳を唱えた件についても賛否両論ある。とはいえ、彼のような形での、実務より名義を活用するような国策的 cultural policy への協力は、現在廃絶されたどころか、冒頭に述べたようにますます盛んである。国策的 cultural policy そのものを否定する理由はない。

日本語教育についていえば、戦前期について「北米でも南米でも日系移民の最大の特徴は、彼らが子供たちの教育をもっとも重視したことである」という指摘がある。これを踏まえていえば、一九三〇年代前半には二万人以上に増加していた日系ブラジル移民の数は、一九三五年から減少し始め、一九四〇年には一五六四名まで落ちるのは、「ブラジルと日本両国におけるナショナリズムの急激な台頭」が世界的な動向の一部として認められる時期だから、という説明が一番明快ではあるが、それだけでは単純にすぎるだろう。当時、日本語教育が困難になったのを案じ、子供のためにペルーに見切りをつけ、続々と日系移民が帰国したという事例を鑑みれば、藤村の焦りも理解できようし、同時にこうした情勢下にあるブラジル内政への介入の危険を、外務省が熟知していたということも了解されるであろう。特に日本語教育の問題は同化のネックでもあり、ここに政府が関与していると公言して日系社会に危難をもたらすわけにはいかない。

#### 四 ナショナリズムとエキゾティズムの高揚

この間、藤村のブラジルに残した足跡は、意外なかたちで変貌を遂げる。

前述の藤村の歌碑は、日系人たちのための初の「日本病院」記念碑となっているのだ。

日本病院設立は、日系人たちの年来の希望であった。大正十三年に在伯日本人同仁会が組織され、大正十五年にはサンパウロ市郊外に土地が購入されるのだが、日系人は富裕層が薄かったために計画は進捗しない。昭和九年、皇室から病院設立資金に五万円、同仁会に一万五千元が下賜され、翌十年以降は三年間にわたって政府から毎年五万円の助成金が支給されることとなる。その結果、記念事業年の前年、一九三九年には病院が完成する。

この病院のモニュメントとして、藤村の詩碑が新たな光を浴びることになるのだ。皇紀二千六百年記念事業刊行物『ブラジルにおける日本人発展史 上巻』。本書は著作兼発行人の青柳郁太郎の住所も、印刷所の株式会社常盤印刷所の住所も東京市であり、発行所の住所は、東京都麹町区霞ヶ関外務省亜米利加局（ラテンアメリカ中央会内）である。一九四一年当時のブラジル日系社会に、このような図書刊行の余力はなかったであろう。同書の巻頭写真ページには、日本病院を象徴する写真として、日本病院設立記念碑が輝かしく登場する。

写真には、「第一回移民渡航三十周年記念碑（昭和十四年サンパウロ日本人病院前庭に建つ、裏に同十一年ブラジルに遊びたる島崎藤村、古人の歌四首を誌す。）というキャプションがついている。つまり、藤村の思惑を大きく裏切り、彼の万葉集の詩句はあくまで「裏」なのであって、写真には百二十三名の移民の名が刻まれた「表」面だけが写っているのだ。「裏」の写真は掲載されていない（図、一）。

もともと、藤村がブエノスアイレスに渡航した際、外務省や国際文化振興会から助成金を得ていた理由のうちには、記念事業のひとつとして東京オリンピックなどと共に、一九四〇年に東京で国際ペンクラブ大会を開催するため尽力すべし、という当局側からの依頼という事情が含まれていた。一九四〇年の記念事業とは、いうまでもなく皇紀二千六百年記念事業を指す。

外務省アメリカ局は、藤村に資金提供して南米に派遣し、東京での国際ペンクラブ開催の約束を取り付けさせ、ブラジルからの「通告」を彼に渡し、皇紀二千六百年記念事業としてのペンクラブ大会は途絶させても、記念図

書『ブラジルにおける日本人発展史』を何とか刊行する。そして、巻頭写真では、藤村の詩碑を「裏」として、ページをひらく読者の目前から消滅させてしまう。藤村は、本質的には外務省の対等な協力者ではありえないのだ。

しかし、日系人たちにとっては、あるいは日本人にとっては、果たしてどちらが「表」なのだろうか。実際にはこの記念碑は表裏一体であり、この二重性こそ、海外におけるナショナリズムの特性の、誠実な反映といえよう。

詩人としての藤村は、この後、不思議な再生を経験する。坪井秀人が行った調査によると、大東亜戦争中に放送された詩の朗読では、作品で選ぶと、藤村の「常盤樹」がもっとも多く読まれているという。特に好戦的でも国家主義的でもない、「かの常葉樹の落ちず枯れざる／常盤樹の枯れざるは／百千の草の落つるより／傷ましきかな」という詩であるが、「ラジオの放送はどのようにこれを〈愛国詩〉に仕立てていったのであろうか」「四十年前も前の藤村の「常盤樹」が採用された理由はわからない」と、疑問を投げかける。

とはいえ、初出は一九〇〇年『新小説』になる同じ藤村の「椰子の実」が、一九三六年になって大中寅二の作曲による国民歌謡となって流行することも、同じように合理的な説明は難しい。後者があるため、放送の背後に詩人官僚による国策的配慮があった、とかんぐるのも筋違いである。

「常盤樹」と「椰子の実」のどちらも、遠方に想像される、いずこもしれぬ南国がテキストの背景にある。当時でいえば南方進出を髣髴させる戦時下のファンタジーといえなくもなかるうが、藤村の場合は制作年代が古すぎるため、他の作家・詩人の南洋幻想とは異なる。おそらく、当時、紀行文の新聞連載や帰国談話の新聞掲載で話題になった彼の南米行が人々の脳裏にまだ残っており、ここから展開された流行だったのではないだろうか。

改めて昭和の国民詩人となった藤村が、ラジオを通じて国中に響かせた「メロディアスな声」が現出させたのは、軍国主義的共同体の日本ではなかった。そうではなく、地球の裏側で日本を夢見る同胞達の共同体、日系ブラジル人コミュニティである。

さらに、児童文学者としての藤村作品の流行が開始される。

晩年の、ベストセラー児童文学者としての藤村については、これまでほとんど研究がなされていなかった。彼

の児童文学への意識の高まりは、昭和十五（一九四〇）年刊行開始の「藤村童話叢書」中の『力餅』、『幼きものに』『ふるさと』等の記述から確認できる。この叢書が好評を博していた点については、青木正美『知られざる晩年の島崎藤村』が詳しい。同書によると、昭和十五年から昭和二十六年にかけ、『力餅』が四十七版、『ふるさと』が四十版、『をさなものがたり』が二十七版、『幼きものに』が二十三版を重ねている。「藤村文庫」と言い、この叢書と言いい、何故この時代、そして昭和三十年代位まで、この国にあつて藤村本はかくも売れたのか、国民文学足り得たのか、そして逆に今読まれなくなったと言われるのか、この答はしかし私が単純に言える問題ではない」と、青木は結論を出していない。

一九三〇年代後半以降の藤村の児童文学志向は、南米行から示唆を受けたと考えられる。前述『力餅』、『幼きものに』等の児童叢書のはしがき、選者となった叢書のはしがきに、その旨が端的に書き付けられている。また南米を経て北米に旅した藤村について、「マ先生マは本を見つめ乍ら、わたくしはこれから童話を書きたいと思っています。と低い声でママお仰った時の先生の目は、生涯私は忘れられません。」と、島崎静子は書く。

藤村は一九一三年から一九一六年の私的なフランス滞在後も、児童文学への意欲を見せていた。ただし一九三六年の南米は、フランスとは大きく異なる動機付けによって、藤村を児童文学に向かわせた。それが前述の日本語教育の実践としての童話である。

日本人倶楽部を置く建物の方でA君と私とが旅の土産話をする事になった。（中略）私もそれらの二世を前に置いてお伽話を試みた時ほど、自分ながらよく話せたと思つたこともない。（中略）やがて一人の選ばれた少女が聴衆の中から立つて、特にわたしたちのために日本の唱歌を歌つた。見知らぬ故国の言葉もめづらしげに歌ひ出づるその少女こそ、二世そのものであつた。旅に来て、わたしもその時ほど涙の迫つたこともない。

藤村自身による作品もさることながら、山本有三より引き継いだ『少国民文庫』（新潮社）改版の、戦後も刊行され続ける大ヒットも忘れてはならない。一九三五年から三七年にかけ、予約出版の形で刊行された本叢書は、

一九四二年に藤村編集による改訂版が出る。戦後も昭和二十三年、昭和三十一年に形を変えながら刊行。そして一九九八年、インド・ニューデリーで美智子妃がこの叢書のうちの『世界名作選』に言及した時、再び国内にブームが起こり、同書は復刻刊行されるに至るのである。

世界の名作として選ばれているのは、ラッディアード・キップリング、カレル・チャペック、マーク・トウェイン、オスカー・ワイルドらの童話、ポール・クロードル、エーリッヒ・ケストナー、タゴール、ウィリアム・ブレイク、フランシス・ジャムの詩など、多彩な内容である。『ジャン・クリストフ』やフランクリンの自伝の抄録、アインシュタインのエッセイなども含んでいる。

藤村は前述のように、南米からの帰国後は、児童叢書の前書きなどに南米旅行の話を必ず織り込んでいる。この時期に藤村が関わっていたほかの叢書、たとえば『新作少年文学選』（新潮社、一九四〇）などでも同じである。童話叢書における藤村の南米旅行話は、執筆の動機付けであると同時に、読者や保護者のこころを誘う魅力ともなっていたのだろう。これらの叢書は売れに売れ、版を重ねた。

晩年のこのような生産的な藤村を、国策協力と国家主義の側面から批判するだけであれば、彼の不思議な、こうしたナショナリズムとインターナショナリズムのもつれと活力を、十分理解することはできないだろう。

児童文学者としての藤村の数多の読者のうち、長じて聖心女子大学で英文学を学んだ女性が、のちに『少国民文庫』のうち、疎開先に父が持ってきてくれたという『世界名作選』収録作品のタゴールなどについて、言及することとなるのである。この時の美智子妃こそ、晩年の藤村と外務省の理想をともに実現したような存在である。

この講演は、一九九八年のインドでの核実験によって、国際児童図書評議会（IBBY）ニューデリー大会参加が不可能になった皇后が、ビデオによって行った基調講演である。この講演ののち、山本有三ブームも到来するのだが、美智子妃自身の発言によって、実際に彼女が手に取ったのは山本有三の初版ではなく、島崎藤村による改訂版であったとわかる。同年に国内でもビデオがテレビ放送され、さらにこの講演に基づく『桶をかける』も刊行された。史上初めての、テレビからの皇后の語りかけであった。

宮原安春『祈り』には、「九五年にIBBY会長のカルメン・デアアルデン夫人から九八年のインドで行われる世界大会への招待を受け、また、IBBYインド支部会長ジャファ夫人からは基調講演のお願いが出されていた。

皇后はIBBY世界大会への出席の可否を宮内庁に問い、宮内庁は政府の見解にゆだねた。インド駐在の大使、内閣官房、外務省トップの意見が交わされた。その結果、世界に対する日本の文化の発信の少なさが囁かれていた現状や、永年にわたる皇后の仕事に対する信頼感があつたせいも、驚くほど肯定的な答えが返されてきた（四十二頁）とある。

果たして皇后のビデオ講演は、ちょうどこの時期から開始された、外務省の新インド外交戦略の開始と、連動するところは何もなかったのだろうか。そしてそれは、国際文化交流に限っていえば、外務省のお膳立てによる日本ペンクラブ創設と藤村の南米派遣に、どこか似ている。一度は文化政策から離れてしまった、南米からの帰国後の藤村の仕事が、ひと巡りして同じ場所に回帰してきたのである。

## 五 最後に

藤村がブラジル大使から「通告」を受けた文章についてだが、一部、インド代表についての記述に補足し、本稿を終えたい。

We submitted the plan to hold the coming world pen club convention in Tokyo in 1940, and all representatives accepted. The delegation of India accepted our proposition delightfully.

国際ペンクラブ大会において、東京での次回の大会開催にインド代表が賛意を示したとはいっても、インド代表には特に決定権があるわけではない。この文章の中で、あえてインド代表に言及するのにはどんな意味があるのだろうか。

まず第一に、アジアで初の国際ペンクラブ大会開催に際し、日本に好意的なアジア圏の代表者はインド一国だけであり、そもそも他のアジア圏出身の代表がいなかったためと考えられる。例えば、一九三八年ブラハで国際ペンクラブ大会が開催された際には、中国ペンクラブ代表が、日本の重慶爆撃を国際ペンに抗議している。

結果的に、藤村は南米行の出資者だった外務省と国際文化振興会の外交戦略に（官僚的な正確さなしに、過剰に、文学的に）近づいていくので、この東京からブエノスアイレスへの渡航が、最晩年の彼のアジア主義的位置への出発点になったと考えられるのだ。ペンクラブ会長就任以前、そして南米渡航前の藤村には、国学への傾倒は認められても、アジア主義的主張は彼の作品世界にはなかった。

次に重要なのは、インド代表の一人 Nag Kaidas (1892 - 1966、以下ナークと表記) と藤村の関係である。このナークについて、先行研究はほぼ何も論じていない。南米行を出発点とする世界旅行の紀行文、「巡礼」からうかがえる藤村のナークへの親近感の表明は、最晩年の『東方の門』でのアジア文明史構想にまで連続しているようである。この紀行文を読む限りでは、ナークの知的で冷静な個性に藤村は惹かれていたようである。帰国インタビューとしての意味は薄くとも、インド代表の日本への好意について、一言しておきたかという見方もできる。

三点目として、藤村が右記のインド代表への好意的発言をするに至る環境を整えた、前述の、外務省と国際文化振興会の存在感である。同時に、その存在感と藤村の言動の連動である。

一九四〇年の東京国際ペンクラブ大会は流れ、国際文化振興会所轄官庁が情報局に移管される。その後は南方文化事業に重心が置かれ、東亜共通語としての日本語普及が目指され、「日本語普及編纂事業七年計画」がスタートする。

## 注

- 1 芝崎厚土『近代日本と国際文化交流―国際文化振興会の創設と展開』（有信堂高文社、一九九九）、一二五頁。
- 2 拙稿「東方の門」執筆前の藤村『島崎藤村研究』（二〇〇七年十月、三五号）
- 3 「巡礼」『藤村全集 第十四巻』（筑摩書房、一九六七）、一二四頁。
- 4 「南米その他の旅より帰って」『藤村全集 第十三巻』（筑摩書房、一九六七）、四三〇頁。
- 5 『藤村全集 第十七巻』（筑摩書房、一九六八）、五二四頁。
- 6 国立国会図書館と国士館大学附属図書館第一司書課の笹岡文雄氏の協力を得て、該当する藤村談話筆記記事を手した。原文記事

は長いので、前後の紹介箇所を省き、彼の談話箇所のみ引用。"At the World Pen Club Convention," he said, "a great discussion was made among the delegations of various countries especially. Mr. Marinetti the Italian representative and the other pacifist representatives. We submitted the plan to hold the coming world pen club convention in Tokyo in 1940, and all representatives accepted. The delegation of India accepted our proposition delightfully. On the question of the translation of literary works all representatives decided to make a periodical bulletin in order to take further steps toward the resolution. However, the question was not settled due to the complication of languages. We were warmly welcomed by Argentina. In Brazil, I in espiced [sic] the situation of our immigrants and I prepared to erect a monument of the Japanese classic language, called the Yamato Kotoba, on a hill near San Paulo. The monument is to be made of marble upon which a poem of the anthology of Manyoshu will be carved. I felt much necessity of the Japanese government's protection of Japanese immigrants in Brazil. In America, I visited the former dwelling of Emerson in New England and paid homage to the great surprise that a number of distinguished American poets are appearing from the city center equipped with stone buildings. In France, the works by Andre Gide and Allain are the most widely read by the people. However, the actual political situation obstructs the progress of literature. There are not many publications and the winner of the Academy Goncourt of 1936 could not get much public favor in such unfavorable situation." (図 1)

7 『大阪朝日新聞』(一九三七年一月二十四日)。

8 『東京朝日新聞』(一九三七年五月二日—八日)。

9 目野は外交史料館で、館員の助力を得て外務省アメリカ局経由のブラジル大使による通達を探したが、残念ながら発見できなかった。

10 森幸一「ブラジルの日本人と日本語(教育)」「国文学 解釈と鑑賞」(二〇〇六年七月号)、十八頁。

11 河路由佳「非漢字文化圏留学生のための日本語学校の誕生」(港の人、二〇〇六) 参照。

12 資料発見者の笹岡文雄氏による一指摘。

13 外務省亜米利加局長吉澤清次郎「昭和十二年度亜米利加局第二課関係執務報告」(一九三七年十二月一日)『外務省執務報告／亜米利加局／第二巻』(クレス出版、一九九四)より。(二)では新聞に転載された日系移民論文についての議論が発端となり、ブラジルで対日感情が悪化した顛末が記述されている。「従来移植民問題ニ関スル我方不用意ノ現説力動モスレハ移民収受国側ノ輿論ヲ刺激シ又本件ノ如ク排日論者ニ依リ歪曲悪用セラルル惧多キ」ため、排日論者に利用されないよう、余計な言動を控えるようにと

の結論に至っている。藤村はまさしく、外務省からは「不用意ノ現説」を披露する人物であったのかもしれない。

- 14 青木正美『島崎藤村コレクション第二巻 知られざる晩年の島崎藤村』（国書刊行会、一九九八）、二〇三―二一八頁参照。青木氏の丹念な同時代資料の収集により、藤村が依頼で出席したものであり、依頼された以上の行動はとっていないのがよく分かる。

- 15 千野鏡子『ペルー遙かな道 フジモリ大統領の母』（中公文庫、一九九五）、一一六頁。

- 16 日本移民 80 年史編纂委員会編『ブラジル日本移民八十年史』（移民 80 年祭祭典委員会・ブラジル日本文化協会、一九九一）、百頁。

- 17 千野前掲書同頁。伊藤力・呉屋勇『在ペルー邦人七五年の歩み（一八九九年―一九七四年）』（ペルー新報社、一九七四）参照。

- 18 外務省亜米利加局前掲書、三八―四〇頁。

- 19 ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会、一九四一。

- 20 現在の場所については、北川忠彦「島崎藤村の「大和言葉の碑文」について」『女子大国文』（一九八四年六月、九五号）、「大和言葉の碑文」補遺『島崎藤村研究』（一九八六年三月、十三号）参照。（図、二二）

- 21 『日本ペンクラブ三十年史』（日本ペンクラブ、一九六七）九九頁には、旅費の援助を受けた「各方面」のひとつに「外務省がふくまれているものと考えられる」との表現がある。また、『国際文化振興会議事要録』（国際交流基金内所蔵）の一九三五年八月九日の記録に、「八、日本ペンクラブ代表島崎藤村、有島生馬両氏ブエノスアイレスに開催の世界ペンクラブ大会に出席に關し旅費補助の件ノ来る九月ブエノスアイレスに開催の世界ペンクラブ會議に両氏出席、其後ボストンに赴き日本古美術展覽會を機とし博物館にて講演の予定なり。右費用補助として金三千円依頼出ありたるにより受諾に決定。」との記述が見られた。つまり、晩年の藤村の「東方の門」に影響を与えた岡倉天心は、藤村がブエノスアイレスへの往路でインド知識人のカーリダーサ・ナーグから教えられたり、その後ボストン美術館で邂逅したりする以前から、文化政策への協力者である彼の作家人生に組み込まれてしまっていたのかもしれない。拙稿「東方の門」執筆前の藤村『島崎藤村研究』（二〇〇七年十月、三十五号）参照。

- 22 『声の祝祭 日本近代詩と戦争』（名古屋大学出版局、一九九七）、二四二―二四三頁。

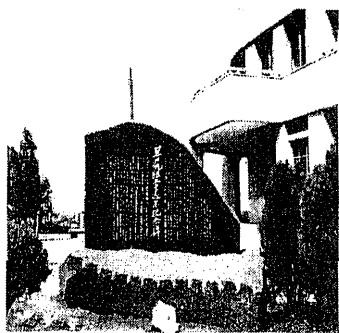
- 23 兵藤裕己『声の国民国家・日本』（日本放送出版協会、二〇〇〇）参照。

- 24 青木正美前掲書。

- 25 青木正美前掲書、一七六頁。



図、一



図、二

- 26 島崎静子『落穂―藤村の思い出』(明治書院、一九七二)。
- 27 「巡礼」『藤村全集 第十四巻』(筑摩書房、一九六七)、一八四―一八五頁。
- 28 美智子『バーゼルより』(すえもりブックス、二〇〇二)には、当時を振り返った記述がある。
- 29 美智子『橋をかける』(すえもりブックス、一九九八)。
- 30 文春文庫、二〇〇一年。
- 31 『日本ペンクラブ三十年史』。
- 32 ナーグと藤村については、前掲の拙稿「『東方の門』執筆前の藤村」で論じた。
- 本稿は、二〇〇七年度国際比較文学学会(二〇〇七年八月、於リオデジャネイロ州立大学)におけるワークショップ Shinagaki Toson and the Official Literature for Children in the 1930 and 40s の内容に、日本比較文学会東京支部四月例会における口頭発表「東京、ブエノスアイレス、ニューデリー―藤村の旅(二〇〇六年四月十五日)」とそのプロシーディングである「東京、ブエノスアイレス、ニューデリー―藤村の旅」『日本比較文学会東京支部研究報告』(二〇〇七年九月、第四号)の一部分を加えたものである。学会発表準備と語学指導を含む研究協力に関し、河野至恩氏、共同研究者である稲賀繁美氏に対し、深く感謝する。